
コロナ禍での実習から見えてきた母性看護技術教育の本質

井上松代（周産期保健看護実習Ⅱ、母性保健看護・助産）

教育上の課題と工夫

コロナ禍の2021年度は、周産期保健看護実習Ⅱ（3年次）の実習が、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、臨地実習のみの臨地群（39名）、遠隔実習（Zoomなど）の遠隔群（18名）、学内と一部遠隔（Zoomなど）の学内群（20名）の3つの実習形態となり、3年次の学生全員が臨地実習を経験できなかった。2022年度からは、学生全員が臨地での実習ができるようになってきたが、ほとんどの実習施設での実習は午前中のみであったため、午後は3密を避け、日々のカンファレンスをZoomで行った。教員は、実習時間が制限されている中で、受け持ち患者の状況と実習指導の流れを考え、学生の看護計画のどの部分を実践させるか、臨床実習指導者と調整して日々の実習指導に取り組んだ。2023年度は、新型コロナウイルス感染症が5月8日から「5類感染症」になったことを受け、コロナ禍以前のように臨地実習の実習時間の制限が少しずつ解除され、学生の看護計画を実践できるようになってきた。

母性保健看護・助産の領域では、コロナ禍での2021年度の周産期保健看護実習Ⅱの教育を振り返るため、その科目を履修して単位を取得した学生を対象に、当時の学修状況に関する調査を2022年度に実施した。その結果、遠隔群は、他の群よりも実習中の学修環境が整っていないことや直接的技術・ケアの修得が不十分であった。画面上だけでは、観察できる範囲は小さく、直接的な実践もできないため、遠隔実習による母性看護技術の修得は難しいことが明らかとなった。一方、遠隔群と学内群は、臨地群よりも人にわかりやすく伝える保健指導の技術を修得していた。臨地群は、患者・看護職者（教員含む）の反応や対応を直接見たことから、また他の2群は臨地実習を経験した学生との対話やZoomでの褥婦の生活などを見聞きしたことから、それぞれ他者との相互作用からの学びを得ていた。また、理由は異なるものの技術修得については3群とも不安を感じていた。

これらの結果より、対面による学生の患者との関り、看護職者（教員含む）の看護実践場面に学生が立ち会うこと、学生同士のディスカッションの時間を持つこと、学生の技術修得への教員のサポートは、看護技術教育の本質だと改めて認識した。

今後は、私たち教員が、これら認識したことを実習で実践することと、コロナ禍で習慣化したZoomでのカンファレンス、「健康管理記録用紙」での体調確認、技術修得のためのオンデマンド等の視聴覚教材の活用を継続する。さらに、実習だけでなく演習科目でも看護技術実践の機会を増やし、自信をもって実習できる学生を増やすことを目指す。

コロナ禍の教育活動を振り返って

コロナ禍で臨地実習ができない時、私たち教員は、臨地実習の代替としての実習環境（病室、看護者、電子カルテ等）、対象者となる患者（シミュレーション人形等）と状況設定（患者基本情報、症状や患者の発言等）を作り、患者役・看護者役・カメラワークなど、短期間でこれらの役割をこなした。その当時は、必要に迫られ、慣れないことも多く、これらの準備と役割をこなすのに精一杯で、上手く実践できたとは思えない。そのような中、学生も本来の学修とは異なる状況で、戸惑いながら実習していたと推察される。
